

## 近代日本の先駆者 小栗上野介

丸山雅子

## 1. はじめに

一般に日本の近代化は薩長を中心とした明治政府によってなされ、幕臣は時代遅れで無能な集団だと思われてきた。

しかし、幕臣の中には薩長などの武士より見識があり、開明的で有能な人物も多かったのである。その中の一人に小栗上野介がいる。彼は遣米使節に抜擢され、アメリカの先進技術や制度を見聞し、日本の近代化の必要性を痛感した。帰国後、幕府に進言して建設した横須賀製鉄所（造船所）は近代工業の礎になった。また、日本で初めての株式会社「兵庫商社」をつくり、貿易の拡大と商取引の活発化をめざした。瓦解しそうな幕府の財政再建や、軍隊の近代化にもつとめた。

しかし残念ながら小栗の功績はあまり評価されていない。それは逆賊として官軍に斬首されたこと

にもよるが、政敵、勝海舟の「氷川清話」を通じた小栗への酷評によるところも大きいと思う。今一度、小栗の功績を振り返り真実の歴史を見直してみたい。

## 2. 小栗上野介の出自

先祖は三河武士の松平隼人正、小栗に姓が替わったのは3代吉忠のときで、吉忠の子忠政は武勇の士として、青年の頃から徳川家康に仕えた。

元亀元年（1570）姉川合戦の時、忠政は槍を振るって家康の危機を救った。以来忠政はあらゆる戦いで一番槍を達成し、「又も一番、又も一番」と話題になり家康から又も一を名乗るようにいわれ、代々又も一を襲名してきた。

上野介は忠政から数えて12代目、文政10年（1827）に生まれる。幼名は剛太郎、通称は又も一で元服して忠順を名乗る。父は

禄高2500石の新潟奉行を務めた上級旗本で、神田駿河台に千坪もの広い屋敷を持っていた。8歳の時から安積良斎に漢学を学び、剣術、柔術、砲術もしかるべき人物に習った。

父が安政2年死去し、家督を相続、安政6年に豊後守に、文久2年上野介に遷任、以後小栗上野介と称される。妻は播州林田藩一万石建部政醇の娘、道子。

## 3. 遣米使節として渡航

小栗は「日米修好通商条約」批准書交換のための使節団の目付に選ばれた。正使、副使につぐ第3のポジションである。

万延元年（1860）正月、ポーハタン号で太平洋を横断した。一般には勝海舟の「咸臨丸」の方が有名であるが、これは使節団を護衛する役目であり航海もサンフランシスコで引き返している。

小栗たちはサンフランシスコからパナマ鉄道で大西洋に出てワシントンで大統領に謁見し、批准書を交換する大役を務めた。

フィラデルヒアでは日本とアメリカの金銀交換比率の協議を行う。通貨交換価値の変更に繋がる

交渉は出来なかったが、小栗の主張するべきところは主張し確実に交渉する態度はアメリカ国民に高く賞賛された。

ワシントンでは米海軍造船所を見学、溶鉱炉、反射炉、鉄を切るスチームハンマーの存在に衝撃を受けた。

ニューヨークから大西洋周りで帰途に就く。単にアメリカを往復したのではなく、アフリカ、アジアを経て英仏蘭など植民地の実情を見てきた。8カ月後の万延元年9月28日帰国する。

## 4. 帰国後の小栗上野介

訪米中、国内では小栗を抜擢した大老井伊直弼が暗殺され、攘夷の風が吹き荒れていた。小栗は同年11月外国奉行に昇進する。

翌文久元年（1861）、ロシア軍艦ポサドニック号による対馬占領事件が起こった。小栗は折衝の任にあたる。事態の打開のためには対馬の上知が必要と上申するが受け入れられず外国奉行を辞任する。

結局はイギリスが艦隊を動かしてロシア軍艦を退去させたが、小栗は軍事力の必要性を痛感する。

その後小栗は幕府の要職で就任、罷免を繰り返す。老中以下誰に対しても率直な意見を述べ疎まされたが、外国事情に詳しく経済面に強く、国家全体に対する展望が出来る逸材は小栗しかおらず、慶応4年(1868)に至るまで4回も勘定奉行に選ばれた。そのほか町奉行、歩兵奉行、陸軍奉行、軍艦奉行、海軍奉行などを歴任した。

### 5. 横須賀製鉄所(造船所)

小栗は海軍強化構想を抱いていた。その手本はワシントンで見学した海軍造船所である。当面は外国から軍艦、大砲、小銃は購入するが、将来は国産化し日本を防衛する。そのためにはあらゆる工業製品を作る近代的な総合工場が必要だった。

当初はアメリカに支援を頼む予定だったが、南北戦争でそれどころでない。次に頼ったのがフランスだった。フランス公使ロッシュは強力な支援を約束した。フランスとの間に600万ドルの借款を結び資金を確保した。これらの借金を生糸貿易を進展させ、鉱山を開発して返済する考えだった。

海舟を始めとする幕閣はこの企画に反論を唱えたが、將軍家茂はこれを承認した。

慶応元年(1865)製鉄所の大工事がはじまった。小栗は首長としてフランス人技師ヴェルニエを任命する。また日本人職工のために職能学校をつくり、フランス語学校もつくった。

横須賀製鉄所の完成は小栗の死後となったが、明治政府に引き継がれ近代工業の基盤となった。

### 6. 株式会社「兵庫商社」

日本で初めての株式会社というと坂本龍馬の「亀山社中」と思っている人も多いが、小栗が設立した「兵庫商社」の方が本格的な会社に近い。

小栗は貿易の拡大と民間の商取引を活性化させるため商社の設立を計画する。

兵庫開港に当たって大阪の商人20名ほどを選んで資本を出させ、商人組合を設立し、役員、定款を決め株主を募る。外国人と取引するには大資本としなければ太刀打ちできない。軌道に乗れば利潤によりガス灯、郵便、電信、鉄道も設置したいと考えていた。

幕府はこの提案を受け入れ慶応3年(1867)6月商社結成を命じ活動を始めたが、半年後、大政奉還により活動は休止し解散する。

### 7. 小栗罪なくして斬られる

鳥羽伏見の戦いに敗れて江戸に帰還した將軍慶喜に対し、小栗は抗戦論を主張したため勘定奉行を罷免された。そして知行地の上野国群馬郡権田村に引退した。小栗が江戸を出立したのは慶応4年2月28日、同行したのは家族や用人、小栗の歩兵ら37名であった。住まいは当面菩提寺の東善寺とした。

権田村に着いた翌日、隣村に博徒が集まり世直しのために小栗を成敗すると周辺の村人を扇動して襲来した。小栗の歩兵と銃撃戦になったが襲った村から犠牲者も出てひとまず収まった。

こんな事件の後、小栗は住まい予定の場所を見廻ったり、用水路を作ったり、畑を開墾したりしたが、突然4月の下旬に薩長政府に歯向かったとして、高崎、安中、吉井の3藩から糾弾された。指令したのは岩倉具定を総督とする官

軍であった。

小栗は自ら出頭し、反逆の意志がない事を訴えようとしたが、その機会すら与えられず、烏川の河原に引きずり出され斬首された。享年42歳であった。

### 8. おわりに

小栗の最後は無念の一語に尽きるが、彼が進めた事業や構想は明治政府に引き継がれ日本の近代化に役立った。

東郷平八郎は日露戦争7年後の明治45年(1912)、突如小栗の子孫を招き、「日露開戦の勝利は横須賀海軍工廠に負うところが大きかった」と小栗の先見の明に敬服感謝の意を表した。

また、大隈重信は「明治政府の近代化の殆どは小栗の構想の模倣にすぎず」と断じている。

司馬遼太郎も小栗を『明治の父』と評している。

国難を乗り越え日本の近代化のために邁進した小栗の功績はもっと評価されて良いと思う。

### 参考文献

『幕臣たちの誤算』 星亮一

青春出版社

『覚悟の人』 佐藤雅美角川文庫  
『忘れられた悲劇の幕臣小栗上野介』 村上泰賢 平凡社  
『小栗上野介忠順と幕末維新』

高橋敏 岩波書店  
『兵庫商社を創った最後の幕臣』  
坂本藤良 講談社

## 特集

# 元漁師が日本開国に貢献 ジョン万次郎

加藤 導 男

はじめに

今年5月下旬、会員の早田信広さんが我家に来訪された。早田さんは現役時代には海外勤務が長く、国内旅行の経験が余りないことから奥様と愛犬とで、国内を旅されているとのこと。今回はお独りで四国一周され、そのお土産話の中で、高知足摺岬のジョン万次郎の銅像の話がでたが、今号の特集テーマに合致するので寄稿する事をお勧めした。しかし、早田さんは、投稿は遠慮されるとのことだった。当方は今年の大河ドラマ『西郷どん』にも万次郎が登場し、興味もあつたので、「ジョン万次郎」について紐解いてみた。

私は昭和五十一年創刊の吉村昭著『漂流』を数年後に購入した。

これは史実であり、天明5年(1781)一月、土佐国高知赤岡村の漁師・長平(二十四歳)他三名が出漁するも、時化に遭遇し漂流、絶海の孤島(鳥島)に漂着する。ただし、島には木もなく、飲み水もない。飛来する渡り鳥アホウドリを食するだけだった。しかし、漂着した仲間は次々と亡くなり、長平独りとなる。

年月を経て、他の難破船が島に着き、寄せ集めの材木等で船を造り、長平は、十二年四か月を経て、帰還したのである(後に東宝で映画化)。

吉村昭は、どの作品も徹底的に取材し、私はその筆致の迫力に感銘し、以後、同氏の殆どの作品を買求めた。

※ ※ ※

◇十四歳で出漁遭難そして米国へ  
ジョン万次郎は文政十年(1827)土佐国(高知県)幡多郡中ノ浜で、漁民の父・悦助、母・汐の次男として生まれる。

天保十二年(1841)一月、中ノ浜から百キロ程離れた宇佐浦(土佐市)から万次郎他四名は延縄漁で出漁(万次郎十四歳)。暴風にあい、七日間漂流し、鳥島(奇しくも、前述の『漂流』と同じ)に漂着したのである。

万次郎は兄が病弱のため、十四歳で漁師見習いとして海にでたのであつた。

飲み水にも欠き、アホウドリを捕らえ、その生肉やその卵を食するほかはなかつたのである。

四月には地震が起こつた。五月中旬にはアホウドリの姿も見えなくなり、仲間一同に無常観が漂うなか、六月を迎えたある日、島の東南洋上に船影を発見した。

アメリカの捕鯨船「ジョン・ハウランド号」に救助されたのであ

る。そこで万次郎の運命の人となる「ウイリアム・ホイットフィールド船長」と出会えたのである。

当時、日本は鎖国政策であつたため、外国船が日本に近づくと、砲撃等を行い港に寄せ近づけない状態のため、ホイットフィールド船長は五人を連れてハワイに向かう。万次郎はよく働き、船員の人達にも愛され船長は船名のジョンをとって「ジョン・マン」の愛称を万次郎に付けてくれたのである。

ハワイに着くが、船長はアメリカ本土に向かうにあつて、万次郎「ジョン・マン」を帯同することを決め、一八四三年五月六日、マサチューセッツ州ニューベッドフォードに港に帰港したのである。

### ◇航海養成学校を首席で卒業

万次郎はホイットフィールド船長の援助により、ニューベッドフォードのバートレット・アカデミーという高等航海士養成の専門学校に入学でき、高等数学・測量術・航海術を懸命に学び、首席で卒業できたのである。この学校は当時、名門といわれ、アメリカ社会では最高学府といわれていた。一八四六年五月、万次郎は十九歳の時、捕鯨船「フランクリン号」